

効果的な交流を生み出す学習の在り方

田 村 充

群馬大学大学院教育学研究科教職リーダー講座

The way of the learning to produce effective interchange

Mitsuru TAMURA

Program for Leadership in Education, Graduate School of Education, Gunma University

キーワード：協同学習、グループ学習

Keywords : Cooperative learning, Group learning

(2017年8月31日受理)

1 はじめに

複数の児童生徒によるグループ学習は、各教科等における学習をはじめ、修学旅行や運動会などの学校行事、部活動も含め、各学校のあらゆる場面において取り入れられ、多くの効果や成果が報告されているところである。また、児童生徒にとっても、グループ学習は、互いの資質・能力を高め合うだけでなく、学校生活における魅力的な活動の一つでもある。

一方、協同学習について、関田・安永(2005)は、

- ・互恵的協力関係がある
- ・グループと個人の責任を果たすことが求められている
- ・活発な相互交流が行われる
- ・個人技能の学習をする機会も組み込まれている
- ・振り返り改善する手続きが組み込まれている

など、グループ学習の有効性を高め効果的な協同を実現することを企図した学習としている。

そして、佐藤(2013)は、効果的な協同を促す条件として、次の点を挙げている。

- 1 協同の価値
他者と一緒に課題に取り組むことの価値や有用性を、すべてのメンバーが感じていることが必要である。
- 2 雰囲気
メンバー間で安心して会話を交わせる雰囲気が大切である。
協同は学習の一形態ではなく、学習場面も含む集団作りの一つの好ましい姿である。
- 3 メンバー構成
意見や学習レベルなどが異なるメンバーを組み合わせることが有効である。
- 4 適切な課題
適度に難しく、しかも多様な意見が出るような課題が望ましい。
- 5 各自の役割
課題解決に向かい、自分の意見をまとめ、他者の意見に耳を傾け、複数の案を比較検討する。
- 6 話し合いのスキル
競争的な話し合い、累積的な話し合いから探求的な話し合いへ。
話すこと、聞くこと、話し合うことの基本を学習する。話し合いのためのルールを自分たちで決定する。
- 7 話形の指導と留意点
根拠や理由を意識しながら、自分ならではの考えを練り上げる場が必要である。
- 8 議論の可視化
ワークシートや付箋を使って、アイデアや話し合いのプロセスが全員に見えるようにする。

- 9 グループ活動を振り返る
個人あるいはグループとして、適切な活動ができたか振り返ることが望ましい。
- 10 グループ学習を授業全体に位置づける
グループ学習の成果を授業の中に適切に位置づける。

2 K小学校の実践から

効果的な交流を生み出す協同学習の実践として、小学校第3学年国語科における次のような取組がある(2017.5～2017.6の実践)。

【単元名】「調べたことを整理して書こう」

【教材名】「新聞を作ろう」

【目標】群馬大学の大学院生にK小学校を紹介する新聞を作ろう

【学習計画】

- (1) どんな新聞を作るかを決める。
- (2) 新聞の作り方を知る。
- (3) 取材の仕方を考え、インタビューやアンケートなどを実施する。
- (4) 記事の下書きをし、割り付けを考える。
- (5) 下書きをもとに新聞を仕上げる。お互いの新聞を読んで、感想を伝え合う。

【実践】

- (1) どんな新聞を作るかを決める。

単元の導入に当たり、小学生向けの最近の新聞や明治時代に発行された新聞を読み比べ(写真1)、両方に共通する点や異なる点を話し合った。

児童からは、次のような意見が出された。

- ・両方とも、大事なことは大きな文字で書かれている。目次もある。
- ・古い新聞は文字ばかりだけど、小学生向けの新聞は、写真や絵がある。カラーにもなっている。
- ・小学生向けの新聞には、チャレンジすることができそうな記事もある。

このことから、両方の新聞とも、児童の興味をそそるものであったことが分かる。

その後、教師が、「群馬大学の大学院生にK小学校を紹介する新聞を作ろう」という学習課題を提示したところ、児童は、非常に意欲を高めていた。それは、



写真1 新聞を読み比べる

読み手が明確であること、今まで経験したことがなかった学習ができること、新聞に掲載する記事が身近な内容であることなどのためと考えられる。児童にとっては、効果的な協同を促す条件の一つである「4 適切な課題」で示された「適度に難しく、しかも多様な意見が出るような課題」であるとともに、「挑戦してみたくなるような課題」「創造性を発揮できる課題」「友達と一緒に取り組む必要性を感じる課題」と言える。

- (2) 新聞の作り方を知る。

児童は、教科書をもとに、新聞作りの過程を理解した後、班ごとに新聞に掲載する記事の検討を始めた。一つの班は3～4人で構成され、学級全体で8班である。また、一人の児童が一つの記事を担当するというものである。

後に完成した各班の新聞の見出しを見ると、次のようである。

- 開校記念日に荒神山を登る
- きずなふかまる荒神山登山!
- 6年生のスーパーイレそうじ
- K小はスーパーイレそうじをやっている
- K小の自まん!!おいしいきゅう食
- セレクトのことを給食の先生に聞いてみた!!
(セレクト:二種類のデザートから一つ選べること)
- みんな大すき図書室のキャンペーン
- 図書のドキドキけい品

ここで、筆者が感じたことは、効果的な協同を促す条件の一つである「1 協同の価値」を児童自らが十分感じ取っていたということである。自分たちの新聞を作るためには、班を構成することが必要であり、班の一人一人が力を発揮すれば、より良い新聞になって

いくという意識を共通してもつことができたと考えられる。

また、同様に、「5 各自の役割」が明確になり、児童一人一人が自分の考えをもち、話し合いができていたということである。自分たちが選んだ記事の内容について、自分の考えを述べ、友だちの考えも受け入れるという姿勢が、各班でみられたということは、以後の学習における協力体制の確立の基盤になったのではないかと考える。

(3) 取材の仕方を考え、インタビューやアンケートなどを実施する。

新聞に掲載する記事が決まった児童は、取材のため、インタビューやアンケートなどに取り組んでいった。

インタビューの方法等について、教師は、次のような資料をもとに指導を行っていた。

インタビューをするときには

- ①じこしょうかいをする。
4年3組の()です。
- ②インタビューの目的を話す。
国語の授業で新聞作りの学習をしています。今日は、()について、インタビューをしにきました。
- ③相手の都合を聞く。
これから、インタビューをしてもいいですか？
(相手のつごうが悪いときには、いつならだいじょうぶか聞いて、やくそくをして、「よろしくおねがいします」のあいさつをして帰る)
- ④インタビューをする。
聞いたことをメモする。
- ⑤お礼をして帰る。
今日は、インタビューに答えてくれてありがとうございました。

相手に気持ちよく答えてもらうために

- ・あいさつをしっかりする。
- ・ていねいな言葉づかいで！
- ・えがおで！
- ・しょくいん室に入るときにあいさつもわすれずする。
- ・「いそがしい中、自分たちのために、インタビューに答えてくれてありがとうございました」の気持ちを持って！

児童は、インタビューを実施するという経験は初めての様子であり、班の中で時間をかけて綿密な打合せ

を行っていた。

このように、班の中で、自分の思いや意見を率直に出し合う姿を見ると、効果的な協同を促す条件の一つである「2 雰囲気」を大切にすることがいかに重要かということを実感することができる。また、このような学習を行うことにより、班や学級全体が、よりよい集団になっていくことが期待されるのではないかと考える。

児童が実施するインタビューやアンケートの主な内容は、次のようである。

【インタビューの主な内容】

- ・「荒神山登山」について：校長先生
- ・「1年生は、校庭でなく中庭で遊ぶのか」について：一年生の担任の先生
- ・「K小学校の校歌のよさ」について：音楽の先生
- ・「給食のセレクト」について：給食担当の先生
- ・「スーパートイレそうじ」について：6年生

ある児童は、校長先生にインタビューする内容として次の二点をシートに記述していた（写真2）。

○どうしてこうじん山にのぼるんですか？
○どうして、こうじん山のちょう上で、校歌を歌うんですか？

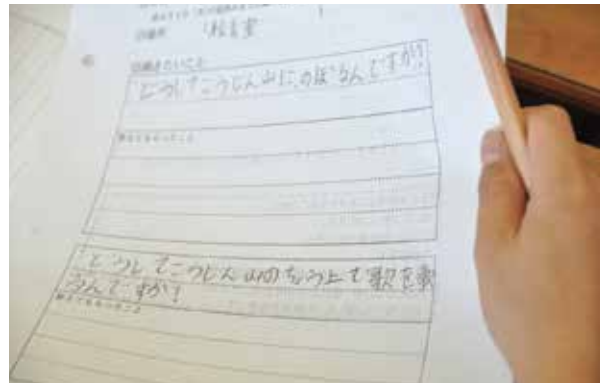


写真2 インタビューする内容をシートに記述する

【アンケートの主な内容】

- ・将来の夢について：4年3組全員
- ・自分の得意なことについて：4年3組全員
- ・好きな給食のメニューについて：4年3組全員

(4) 記事の下書きをし、割り付けを考える。

新聞作りに取り組み、児童が最も難しく感じたのが、記事の下書きをし、割り付けを考える活動だったと思

われる。

まず、記事の下書きに関して、教師は、教科書をもとに、実例を用いて次のことを指導した。

- ・文字のまちがいはないか。
- ・「、」や「。」の使い方はよいか。
- ・主語と述語は合っているか。
- ・習った漢字を使っているか。
- ・げんこう用紙の使い方はよいか。
- ・内容を知らない人が読んでも分かるか。
- ・文の終わりに、「です・ます」と、「だ・である」がまざっていないか。
- ・大事なことをおとさないように書いているか。必要なところは説明を加えているか。
- ・写真や図を入れるかどうか、入れるならどんなものかがいいかを考えたか。
- ・読み手を引きつける見出しになっているか。
- ・文字数を計算しやすいように、ます目のノートやげんこう用紙を使うとよい。

次に、教師は、各班で割り付けを検討する材料として、次のような二種類の割り付け例（写真3）を提示し、各班で話し合うよう促していった。

各班では、示された割り付け例をもとに、次のような話し合いが行われていた。

- ・新聞名は、どんなのがいいか。
- ・それぞれの記事の見出しを、どのようにするか。また、目立つようにするには、どうすればいいか。
- ・どの記事を、どの位置に置くか。一番伝えたい記事はどれか。
- ・文字の大きさや色を、どのように工夫すると、読む人が読みやすいか。
- ・写真や図、グラフなどを、どのように使うか。また、それらの大きさは、どのくらいがいいか。記事の中のどこに置くか。

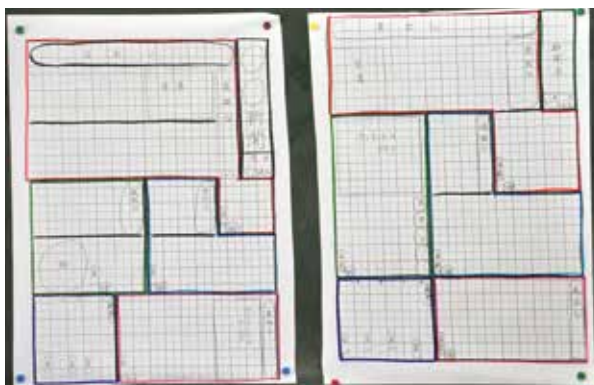


写真3 二種類の割り付け例

このような活発な話し合いが展開されたのは、効果的な協同を促す条件の中の一つである「8 議論の可視化」が行われたためである。

教師は、二種類の割り付け例を提示するとともに、各班に配付した割り付け用のワークシートをもとに話し合うように促したのである。

これにより、児童は、割り付け用のワークシートを用いて、お互いの考えのよさや課題を確認し合うとともに、話し合いのプロセスを共有することができたのである（写真4）。

また、記事の下書きをし、割り付けを考える中で、効果的な協同学習を促す条件の中の一つである「7 話形の指導と留意点」に示されている「根拠や理由を意識しながら、自分ならではの考えを練り上げる」活動が十分に行われていたことも事実である。



写真4 班ごとに割り付けを考える

(5) 下書きをもとに新聞を仕上げる。お互いの新聞を読んで、感想を伝え合う。

児童は、記事の下書きをし、割り付けを考え、清書した紙を模造紙に貼り合わせて新聞を完成させた。



写真5 お互いの新聞を読む

その後、児童は、お互いの新聞を読み合い（写真5）、『上手！』『工夫がいっぱい！』と思う新聞を一つ選ぼう！』という題名のワークシートに記入し、発表したのである。

教師は、『上手！』『工夫がいっぱい！』と思う新聞を一つ選ぶ観点』を、次のように、ワークシートに示していた。

目のつけ所	工夫の例
①文字	ていねいに書けている。 まちがえなく書けている 習った漢字を使っている。
②見出し	思わず記事を読みたくなる。 文字の大きさや色が工夫されている。
③内容	知らない人にも分かるよう、くわしく具体的に説明している。 自分たちしか知らない言葉を使っていない。
④わりつけ	どこに何が書かれているか分かる。 どこを見ればいいのか、まよわずに読める。
⑤グラフや表	見やすい。 グラフや表があるので記事が分かりやすい。
⑥絵や色	美しくきれいに仕上がっている。



写真6 理由が書かれたワークシート

上記のワークシート（写真6）に記入した児童たちは、自らが選んだ理由について、次のように記述していた。

- ・ひきつけられる題名だった。色や絵もきれいになっていた。ていねいに書いていてよみやすかった。とても分かりやすい新聞だった。
- ・見出しが、相手をひきつけるような見出しになっていた。
- ・写真や絵を使ったり、文字の色を工夫したりして読みやすい。

各班が作成した新聞は、学習参観の折に、多くの保護者に読んでいただいた後、本学の教職大学院生のもとへ届いたのである。新聞を読んだ大学院生は、一つ一つの記事の内容や見出しの書き方、割り付けの仕方、写真やグラフの使い方などについてコメントを書き（写真7）、再びK小学校へ届けたのである。



写真7 記事にコメントを書く

大学院生が書いたコメントは、次のようなものであった。

- ・校長先生のお話が入っていて、きょう味がわきました。写真がついていて、何をしたのかがよく伝わってきました。
- ・文だけでなく、イラストを使って説明してあるので、見やすく、楽しい記事になっています。
- ・図書室の本でサバイバルシリーズやひみつシリーズが人気なことがよく分かりました。これからもたくさん本を読んでね。絵がかわいいです。

このような大学院生のコメントを読んだ児童（写真8）の感想は、次のようなものだった。

- ・最初、付箋にどんなことが書いてあるか心配だったけれど、読んだらうれしかった。
- ・頑張って新聞を作った甲斐があった。

- ・いろいろな人（大学院生）が書いてくれたのでうれしかった。
- ・自分たちが作った新聞を、みんなに読んでもらうのは、ちょっと恥ずかしかったけれど、付箋のメモを読んだらほっとした。
- ・たくさん感想とかを書いてくれたのでうれしかった。



写真8 大学院生が書いたコメントを読む

このようなことから、効果的な協同を促す条件の一つである「9 グループ活動を振り返る」活動が適切に行われたと言えるのではないかと考えられる。児童は、本単元の学習を振り返り、グループでの学習を通して、「自分の役割を果たした」「協力してインタビューやアンケートをすることができた」「友達と意見やアイデアを出し合うことができた」などの感想をもち、個人あるいはグループとして、適切な活動ができたことを実感したのではないかと考えられる。

また、単元を通して、効果的な協同を促す条件の一つである「10 グループ学習を授業全体に位置づける」ことにより、児童も教師も協同学習の効果を再認識したと言えるのではないかと考えられる。

3 教職大学院生の実践から

協同学習について、群馬大学教職大学院生に対するアンケート調査の結果から考えてみたい（佐藤・田村2017年5月実施）。対象者は13名、回答は記述式とした。

<アンケート内容>

現職の方は、自分が授業中に行った「グループ活動」(グループでの話し合い、問題解決、課題、製作等々)を考えて下さい。ストレートマスターの方は、自分が教育実習で行った「グループ活動」、あるいは自分が

小中高校生のとときに授業で経験した「グループ学習」を考えて下さい。

- (1) グループでの話し合いや相談や問題解決がうまくいったケースと、うまくいかなかったケースを一つずつ思い出して下さい。
- (2) それぞれについて、うまくいった理由、失敗した理由をテキスト（『学習の支援と教育評価』佐藤浩二2013）に即して考えて下さい（自分の言葉で説明するのではなく、テキストの言葉で説明して下さい）。
- (3) テキストには明記されていないがグループ活動の成否を左右する要因を、あなたのケースから指摘できる場合は、それを記述して下さい。

アンケート調査結果の例を挙げる。

【うまくいったケース】

小学校第4学年・算数

単元名：角の大きさの表し方を考えよう

<グループ活動の内容>

個人活動で三角定規の角を組み合わせ、いろいろな角度をつくる課題に取り組んだ後に、グループ活動で友達がつくった角度について、図や式などを用いてつくり方を説明し合った。

<どのようにうまくいったのか>

- ・自分と同じ考えについては、つくった角度は異なっても自信をもって説明をしていた。
- ・自分が思いつかなかった角度のつくり方については、三角定規の重ね方を見て、どの部分がつくった角度なのかを確かめたり、どのような式になるのかを考えたりすることを通して、気が付くことができた。

<うまくいった理由>

- ・適切な課題：つくれる角度がそれほど多くない。
(15通り程度)
- ・メンバー構成：4人グループで自信のある子から発表していた。
- ・各自の役割：まずは、となりの人が考えた角度を説明する。困ったときは、友達に助けてもらうが、必ず自分の言葉で説明するようにした。
- ・話形の指導：個人学習の見通しを立てる段階で、「合わせた部分」「重ねて残った部分」等を共通確認し、それを使って説明し合うようにした。
- ・議論の可視化：三角定規を使い具体物进行操作しながら

ら、グループ活動を行った。

【うまくいかなかったケース】

小学校第6学年・社会

単元名：縄文のむらから古墳のくにへ

＜グループ活動の内容＞

グループごとに縄文のむらと弥生のむらの想像図を比較して、それぞれの生活の様子について、分かったことや考えたことを話し合う。

＜どのようにうまくいかなかったのか＞

違いは数多く見つけたが、それぞれの生活の様子について考える活動に深まりがなかった。

＜うまくいかなかった理由＞

- ・協同の価値：討議に関する指導と参加・協力に関する指導がなかったため、生活の様子の違いについて考える際に、一部の児童のみの発言で話し合いが終わっていた。
- ・適切な課題：「違いはどこだろう、違いとその理由について話し合しましょう」という課題を提示する際の指示が明確でなかった。そのため、見つけやすい違いばかりに目がいき、違いが出る理由になかなか話が進まなかった。
- ・話形の指導：根拠や理由をしっかりと意識しながら、自分ならではの考えを練り上げる時間を確保せずに、「違い」⇒「生活の変化の理由」の2点を同時に行ってしまった。
- ・グループ学習を振り返る：それまでの学習の中で、グループ活動について振り返ることがなかった。そのため、問題点や課題について児童が意識してこなかった。

上記の例では、うまくいったのは、「適切な課題」「メンバー構成」「各自の役割」「話形の指導」「議論の可視化」が要因であると記述しているが、他の回答者12人のうち7人も、うまくいったケースの要因として「適切な課題」を挙げている。多様な意見が出るような課題、適度に困難度のある課題、取り組む方向性が明確な課題、必要感のある課題をどう設定するかが、グループ活動における特に重要な視点である。

また、他の回答者12人のうち4人が「雰囲気」を挙げている。「学級全体で安心して会話を交わせる雰囲気作りを一学期に意識して行ったため、お互いを認め合うグループ活動ができるようになった」「メンバー

間に安心して話し合える雰囲気があった」「分からない時には、どこが分からないのかを恥ずかしがらずに質問できる雰囲気があった」等の記述からも、グループ活動を効果的に行うためには、児童生徒間の人間関係づくりも大きな視点であることが分かる。一方、様々なグループ活動を用いて、温かな雰囲気の中で自己存在感を感じることでできる学級作りを目指すこともできるのではないかと考えられる。

また、上記の例では、うまくいかなかったのは、「協同の価値」「適切な課題」「話形の指導」「グループ活動を振り返る」といった複数の要因によるものとしている。他の回答者も同様に、「適切な課題」「話し合いのスキル・話形の指導」「メンバー構成」といった複数の要因がからみあった結果、うまくいかなかったと記述している。特に、グループにおける話すこと・聞くことのルール作りや、根拠や理由を明確にした話し合いの仕方に関する指導の必要性を指摘する記述が目立った。さらに、安易なメンバー構成によるグループ活動の失敗例の記述もあり、多様な意見が活発に交わされるグループ活動にするためのメンバーの構成の仕方も重要なポイントであることが伺える。

4 まとめ

平成29年3月に公示された小学校及び中学校学習指導要領では、「第1章 総則 第4 児童（生徒）の発達の支援」において、「児童（生徒）が、基礎的・基本的な知識及び技能の習得も含め、学習内容を確実に身に付けることができるよう、児童（生徒）や学校の実態に応じ、個別学習やグループ別学習を取り入れること」を明記している。今後、カリキュラム・マネジメントの実施や主体的・対話的で深い学びの実現に向け、効果的な交流を生み出す協同学習の在り方について、学校全体で共通理解を図り、取り組んでいくことが期待される。

引用文献

- 佐藤浩一（2013）. 協同学習【理論編】佐藤浩一（編著） 学習支援と教育評価－理論と実践の協同 北大路書房 pp.57-68
- 佐藤浩一（2014）. 学習支援のツボ - 認知心理学者が教室で考えたこと 北大路書房 pp.155-163

関田一彦・安永 悟 (2005). 協同学習の定義と関連用語の整理 協同と教育.1.10-17.
光村図書 (2015). 国語 四上 かかやき 平成26年検定済

光村図書出版
文部科学省 (2017). 小学校学習指導要領
文部科学省 (2017). 中学校学習指導要領

(たむら みつる)